

『九大本 筑紫方言（つくしことば） 影印及び翻刻』

森脇茂秀

つくしことは

筑紫方言（つくしことは）

又

長崎にては

001 兄を

親方

ほう

ばほう と云

とも

以下 夫 妻 などその余もすべて夫を妻を
などやうにをもしそへてかくべきなれどことぐ
しかか、んも煩はしければはおけり見ん人をもじ
をそへて見るべし 下の と云 のもじもおなじ

又上に何々を とかきたるは 江戸の方言（ことば）にて下に何々

002 夫

と云と書たるが 九州(つくし)の方言(ことば)也 江戸の方言の中には
雅俗(がぞく)通用の言葉もありまた 余の国(くに)にていへると
おなじ言葉も少からねと 多くは ちまたの俗語(ぞくご)なり
さらばことごとく 江戸にていへる何(なに)をとかくべきなれと
是はた煩(わづら)はしければことごとくにしかはか、ずなんさてその
江戸の俗語にはいみじう なまれるも すくなからねど
そをことごとく あらためものせんもまたたくしければ
なまれるは なまれる ま、にかきつけ おきぬ見ん人
あながちに笑(わら)ふことなかれ

おやじ

私おやじがといへるは其身の

夫の事也

003 妻

よめ

是もおなじく私よめがと云は

其もの、妻の事也娘の事は

せがれのよめと云

「(一才)

この外 ぢ、ば、と、か、の類(たぐひ)
その余のうからも皆かはる事なし

但長崎にては孫子より ち、ば、

と、 か、 を呼ぶに おぢ、 おば、

おと、 おか、 と呼びて様とも殿共

いふことたえてなし聞ならはぬ事

なればいと ことやうにこそ聞なされ

たりけれ

004 名主 (なぬし)

庄屋 (しやうや)

乙名 (おとな)

長崎にて

005 組頭 (くみかしら)

名頭 (みやうとう)

宿老 (しゆくらう)

部當 (べたう)

長崎にて

日向に限りて

(1ウ)

日向の部當は別當 (べたう) の事なるべし

こは古き唱にて しかもべたう とつめて

いへるなどさながら雅語 (みやびごと) の名残 (なごり) と聞

えていとめでたし

006 神主 (かんぬし)

ほしや

柀宜 (ねぎ) 祝子 (はふり) の類をすへてしか云奉
社といへるやうの事なるべし

007 幽霊 (いうれい)

いうれん

長崎の唐館 (たうくわん) にいうれん堂 (だう) といへる
堂あり そは別に物語あり

008 辻君 (つちきみ)

肥前にて

肥前嶋原にて 肥後にて

江戸にてよたか

おつたぼう

にふんざう きぶし

上方にてさうか

長崎にて

又

天神 平八

といふ物を

とも

嶋原にて にふんざう といへるは むかし 一 (2オ)

銀二分にて 賣たる故に 二分ざうかと

いへるを今 二分ざう と斗いへる也と云

又長崎にて 天神と云は廿五銭にうりたる

故也といふ さらば普門品など、もいへる

にやといひてわらひぬ おつたぼう きぶし

平八などいへるはいか成ゆゑよしにや

009 乞食（こじき）

ほいとう

こは陸奥出羽のあたりにても

云ことなり

010 癩病（らいびやう）

こじき

011 病（や）む

長崎にて煩ふ

いたむ

やみ臥て居るを いたんで居ると云

と云を

012 病（やまひ）やうく

快く

江戸にてひだつ

さかだつ

此ほど段々さかだちます

なと云

と云を

「(2ウ)

013 手足などの

たゆく覚る

といふ事を

あやくるしい

江戸にてだるいなど云事也又中風をやむ

人の手足の不髓（かなはぬ）なる言語（ものいひ）の自在ならぬ

014 痘痕(あばた)

江戸にて

あばたと云事を

などをもしか云あやにくるしきといふこと
なるべし

せんきう

こは顔に千ほど灸すゑたるやう也と

いふ事也と長崎人いへりをかしきことなり

015 くちびる(唇)

つば

016 乾(かは)く

いろく

つばがいろくなど云

「(3オ)

017 目のさめた

と云事を

おぞんだ

おどろいた

とも

又

朝なく起出ることなども しか云こは
夢打おどろき など云雅語のうつり
たるなるべく聞えて中々に

めでたし

018 他出(たしゆつ)する

ありく

といふ事を

019 歩行(ありく)

さるく

020 何方(いつかた)へ行

何方へ出(で)うく

021 あちらへ行

あんげへいく

022 こちらへ行

こんげへいく

「(3ウ)

023 早(はや)く行て

こすく(ごうさい)

024 早く帰れ

すべていそぐことをこすくと云

など云事を

長崎にて

025 歩行(かち)にて行

かちからいく

026 舟にて行

舟からいく

こはかちより行といへる雅語の名残おぼえて
いとめでたく聞ゆ

027 道程（みちのり）の

一里にあまる

所を

一里何合

十丁斗を三合 半里を五合 廿四五丁を

七合など云

028 物を片付ける

029 しまふ

など云事を

なほす

衣類（きもの）を箆筒（たんす）へなほすなど云又とりちらし（4オ）

たる物を かたへに片よせ 置くなどをも

わきの方へなほすといふ

030 戸を閉（しめ）る

戸をせく

雨戸をせく など云

031 人を呼ぶ

おらぶ

古言（こげん）叫（さけぶ）を おらぶと云 たけく呼（よば）はる

ことなどをいふべし 只かりそめに

人を呼ぶを おらぶといふは少しことしくしく

きこゆるやう也されど古言（いにしへことば）のさながら

残りたるものなりかし

032 穴を掘る

ほげる

障子などに穴の明たるを穴がほげたと云

長崎の沖(おき)に ほげ嶋といへる嶋あり大成

穴の明たる巖(いはほ)ある嶋なり

「(4ウ)

033 ・【朱】打擲(うちたゝく)

とらする

軍書(くんしよ)には いでもの見せんなど云 江戸にて

下さまに くらはすぞ など 云ことを とら

するぞといふ 不覚をとらすぞといふ事

なるへし

034 ・【朱】喧嘩(けんくわ)して

つかみ合

こづかアとる

と云事を

035 ・【朱】罰(ばち)があたる

ばちをかぶる

こは蒙(かうむる)と云事なるへし

036 ・【朱】雨雪などにぬれて

しるしい

ひや、かなるを

「(5オ)

037・【朱】気味(きみ)の

わるい

いびしい

と云事を

038・【朱】おそろしい

ゑづい

039 掃(はく)

はは(わ)く

040・【朱】かわゆがる

むぞがる

041 いらせられた

おでました

042 歎(なげく)

いとなむ

043 おうちやくもの

044 ふといやつ

どちれんやつ

など云事を

045 寒気(かんき)の

「(5)ウ」

つよいと云

よいかんじや

ことを

046 氷柱(つらこ)

もがんこ

田をすきかへすに用る馬鋸(まぐは)と云ものを九州にて

もがと云よしそのもがの歯(の如く)

(校訂者、三字の上に紙を貼って消す)

047 実(み)の

よくうれた

入たる

048・【朱】実(み)の

しひら

入らぬ

古言 糝を しひなせ と云 此言の

なまりなるべし 他国にて しひなと

いふも 片言のやう也

長崎にて

049 能い所(よいところ)じや よか所じや よかるといへることの略成へし(6才)

050 能い事じや

長崎にて

よかことじや

もう よい〜など云事をももうよか〜と云

051 大きなる

ふとい

〃 又 又

052 小き

こまい

こまか ほそい

とも

ふとい こまか ほそい のいもじも言
によりては かもじにかへて ふとかもの
こまかもの ほそかものなど云

053 忝(かたじけない)

長崎にて

近ごろ

肥後にて

ちやうじやう

是はちかごろ 是はちやうじやうと云て忝い
と云ことは たえていはず

「(6ウ)

054・【朱】手ン手（てんで）

我（わ）レ／＼
と云事を

長崎にて

てんどろぼうどろ

055 肩車（かたぐるま）

と云事を

ずんきやん／＼

056 物のこゝら

かりたる

もろくりした

もろくつた

とも

又

江戸にてうり物を一山何程など云ことを一もろくり何程と云

057 さうじや

けれども

と云事を

そればつてん

てんどろぼうどろより以下（しも）四條（よくだり）は唐人（たうじん）の
言（こと）のうつりたるよし也この外にも唐言葉（からことば）の

うつりたるとおほしき言(こと)粗(ほろ)「」の右肩上に濁音符「」聞ゆ

058 あの様

あのごと

「(フオ)

059 此やうに

長崎にて

このごと

此ごとの言葉はさながら雅語にていとめでたしされど雅語にはかならずやうといはではかなはぬ所をもごとと云事なきにあらず

060 投げる
061 解ける

など「」を

なぐる

とくる

062 讀(よま)せる

よまする

063 書(かゝ)せる

かゝする

064 立(た)てる

たつる

065 當(あ)てる

あつる

066 累(かさ)ねる

かさぬる

067 束(つか)ねる

つかぬる

068 並(なら)へる

ならぶる

069 調(て)べる

しらぶる

070 詠(なが)める

ながむる

071 集(あつ)める

あつむる

「(7ウ)

072 枯(か)れる
073 折(を)れる

かる、
をる、

074 見える
075 聞(き)こえる

みゆる
きこゆる

すべて斯やうに俗に えかせてねへめえれ
えのかなを用ふる言葉を長崎にてはかならず
うくすつぬふむゆるうのかなにかへいふ常の
事也鈴の屋翁の玉勝間といへる随筆に肥後の
国人の来れるがいふことを聞けば世に見える」(8才)

聞えるなど云たくひを 見ゆる 聞ゆるなど
ぞいふなるこは今の世にはたえて聞えぬ
雅言なるを 云々 みなかには古言の残れる
多し 云々 とか、れたり されど肥後は
もとよりにて肥前にても 長崎をおきて
こと所又筑前筑後などにも 見ゆる 聞
ゆる などいふもの多くあれど中にはたが

へるもすくなからず ひとり長崎にては

雅人はさらにもいはずいかならんいやしき下郎

里人なりとも おしなへて一言だにたがへる事

なし いとめでたき言葉つかひ也けり

076 何(なに) など

何ども かども

077 かなど

何々でもといふことをも 何々どもと云

078 それは

それは これば

079 これは

「(8ウ)

080 一つ

ふとつ

081 二つ

ひたつ

越後の方言のことく ひ ふ のたかひ少からす

082 奢(おごる)

おご(「こ」の右肩上に)。(「お」る

083 興(おこ)。「こ」の右肩上に)。(「る

おごる

084・【朱】鉢(はち)。「ち」の右肩上に)。(「

はぢ

085 恥(はぢ)

はち(「ち」の右肩上に)。(「

斯やうに清濁のたかふ言すくならずまた

おごる といへるなども ごもじをごと軽く

濁るべきを おごると おもくのみ濁りて

いふたとへば 不知顔など云はんにしらずのず

もじは「(9オ)

おもく濁りて がほ の がもじはもと語勢に

よりて濁るかななれは がほとかるく濁りて

しらず がほといふべきを しらずがほと

086 延びた

のんだ

一里にはのんである二尺にはのんであるなと云(9ウ)

やうに二字ながら重くのみ濁りていへると
 耳だつやうにこそ聞えたりけれ すべて五音五
 十字の中に さ行 た行 は行 のかなはもと
 より軽くは濁りがたく あ行 な行 ま行
 や行 ら行 わ行 のかなは清音のかなにて
 おもくも軽くも濁るべきやうなしひとりかき
 くけこのかなはおもくもかろくも自在に濁
 へきかなゝる(圈点(〇))を一むきにおもくのみ濁りいへりすべて
 の言葉軽くにこりてあるべきを重くのみ
 にこりいへるはいとこちくしくておなじ言葉
 にてもことさらにひなびて聞ゆるわさに
 なんありける

087 飲んだ

のうだ

088 頼んだ

たのうだ

かゝる音便の言葉も少からず

089 蚊屋(かや)をつる

かやをひく

090 木綿(もめん)合羽(かつば)

091 袖がつか

など云物を

あまばをり

092 ざる(筥)

しやうけ

飛驒美濃のわたりにてもしか云

093 看板(かんばん)

かんばん

094 燈心(とうしみ)

じみ

「(10オ)

095 柴(しば)

ばいら

長崎にて

096・【朱】かなだらひ

めんぼう

面盆(めんぼん)と云事にて是も

唐言葉のうつりたる也とぞ

いへる

097 鉄瓶 (てつびん)

さゆやくわん

098 土瓶 (どびん)

びん

又

099 たわし

さはら

さうら

とも

100 俵

たうら

飛驒にてたわしをたうらと云

101 凧 (たこ)

はた

蛇腹はた ばらもんばた など 云あり末に

図あり

102 ふどし

へこ

へこをかくなど云 又 もつかうふどしと 云物を

越中べこ 肥後の国にかきりて 江戸べこ 又

東国べこなど云こは国主のみ名を憚り

てのこと、聞ゆ

「(10ウ)

103 藝(ひきがへる)

わくど

肥後にて

長崎にて

たんがく

どんくう

周防洋(すはうなだ)にわくど嶋と云嶋あり 藝の形に似
たる姿の嶋なり さらば中国にてもおなじく
わくど、いふと見えたり

104 雨蛙

びきた

長崎にて

105 青蛙

青びきた

青ひきどんくう

肥後にて たんがく といへるは 古の たにぐ、
の なまりなるべく おほゆると 肥後の国人の「(11オ)
語りしは 誠にしかなるべし」と 鈴の屋翁の

隨筆に見えたり 長崎の どんくうも
たにく、のつよくなまれるなるべし

106 亀

かうづ

107 鼈 (すつぼん)

がめ

108 蜂 (はち)

長崎にて
はち

109 蜻蛉 (とんぼ)

へんぼ

110 蜘蛛 (くも)

こぶ

111 平たくも

てんこぶ

112 大成くも

日向にて
くまこぶ

「(11ウ)

113 女郎ぐも

でろこぶ

114 鯨の肉(くじらのにく)

おはけ

おはいけ とも

白身を おはゆ(や)きと いふよし也

又

115 あま鯛(たひ)

くづな

116 ひしこ

はだら

117 しやうさい

ふぐ

がんばん

と云ものを

118 さるぼう

し、貝

119 かき

せつか

せつかといへるは石花の字音なる
べしといへり

「(12オ)

120 あざつき

ちもと

江戸にても上つかたの奥むきなどにていふ
ことなるを そのまゝにいへる いなかは中／＼に
めつらしく聞ゆるになん

121 豆腐(とうふ)の

から

とうふのはな

122 唐(たう)がらし

こせう

123 胡椒(こせう)

こせう

つぶこせう など云

124 ・【朱】唐(たう)なす

ほうぶら

かほちやは カボチャ ほうぶらはホウブラ
といへる 蠻国より種の渡りたるもの也と
長崎入いへり

「(12ウ)

125 里いも

たゞいも

- 126 さつまいも
たういも
りうきついも
とも
- 127 つくいも
つくりいも
甲斐信濃にてもしか云 江戸にてつくいも
といふはかたことなるへし
- 128 そら豆(まめ)
なつまめ
- 129 藤(ふじ)豆
なんきんまめ
- 130 いんげん
さんどさぎ
- 131 十六さぎ
さぎ
たゞ さぎと斗云
- 132 菌(きのこ)
なば
松だけなば 初だけなば など云
「(13才)

133 煎餅(せんべい)

せんべい

134 沢庵漬(たくあんづけ)

百本づけ

蘭人

135 たばこ

たばつく と云よし也

この たばこ といふことはもと エゲレス の言

葉にて則 エゲレス には 昔も今も

たばこと云也むかしはじめて渡りたる

時よりして 蠻語の唱のまゝにて弘まり

たるものなるへしと おらんだ通辭なに

がしいへり

「(13ウ)

追 加

136 駒下駄(こまげた)

どうじま

137 草里下駄(さうりげた)

ごめん

138 足駄(あしだ)

さしげた

139 琉球表(りうきゅうおもて)

しちたう

140 寺(てら)

ちえら

ちえを二字一音につめて ちえらと云

是も唐言葉のうつりたるものかするへからず」(14オ)

141 能い天氣

じやと云

ことを

りつばなてんきじや

すべてよろしい(圈点)○(うつくしいきれいといふことを)りつばと云

142 むさい

きたない

と云事を

うらめしい

144 わるい

そまつな

おろい

など云事を

こは則 わるい(圈点)○(と云言の五音相通にて)轉したる

ものか又 おそといへる古言のうつりたる物
なるへし

146 まぐろ

しび

魚買がうりありくに しつべいくと云

江戸にてきはだまぐろなと云ものをも すべて

しびと 云 陸奥出羽などにも云言也」(14ウ)

147 うど

しか

うど芽(め)をば うど といひ茎(くき)やゝのび立
たるを しか と云よし也

148 蕨粉(わらびのこ)

わらびのせん 飛驒にてはわらびのはなと 云

149 露の塔(ふきのたふ)

くわんどう

古言 款冬(くわんとう) を やまふゞき と云此字音
をいへるなるへし

150 木の実を

あやす

柿をあやす 栗をあやすなど云

おとす

151 布をうつ

ならす

砧(きぬた)など打をならすと云(15才)

152・【朱】懸竿

ならし

ほしものをならしに懸ると云

153 染色の

びんらうじ

黒を

154 紺を

くろ

155 染付(そめつき)の

くひつかぬ

わるい

156 御内儀(おないぎ)と

ごりよんさま

いふことを

上方にて御寮人(これうにん)さま など 云ことのおつり

たるなるへし

157・【朱】髮結(かみゆひ)

いつせん

「(15ウ)

158・【朱】窓(まど)

さま

159 手伝(てつだひ)

かせい

160・【朱】きもを

たまがつた

つぶした

たまげた とは他国にても云事也魂(たまげ)消(さえ)たと云ことなるへし

161 あればかり

あれがんにやう 江戸にてばつかりと云こと也

162 こればかり

これがんにやう

163 さうであらう

さうばな もうよいはな など云ことをも もう

164 こうであらう

こうばな よいばなど云

長崎にて 豊後にて

165 何方(どこ)へ行

とこさに行く どこしに行く 「(16オ)

166・【朱】かつぐ

からう

物をになふ事也 からうでいく からうで来た
など 云

167 肩(かた)をかへる

かたをうつ

只うつと斗も云 かこかきなどが さア肩を

かへようと云事を さア うてくと云

168 草履(ざうり)を

ざうりをふむ

はく

下駄 足駄のたくひすべてしか云 「(16ウ)

【付記】「九大本 筑紫方言」影印並びに翻刻については、九州大学付属図書館に掲載許可を賜った。掲載許可に關しては九州大学人文科学研究院高山倫明先生、九州大学附属図書館河上章彦氏に御指導、御配慮を賜った。ここに銘記して感謝申し上げます。

(もりわき・しげひで)